

丹生川上神社の研究

始めに

この「丹生川上神社の研究」というテーマは大変難しいものだと思う。このテーマの中には様々なものが入り込んでくるとというのが感想である。今、箇条書きにしてみると

ア、「丹生」について

イ、「丹生神社」と「御祭神」について

ウ、「丹生川上神社」について

エ、「官幣大社列格」について

オ、「考証」について

カ、「小川氏」について

キ、「神武天皇親祭の丹生川上」について

ク、「吉野宮、吉野離宮」について

などがあり、これらのすべてをここで考察することは不可能である。したがって詳しく考察する事とそうではない事に分けて考えてゆくことにする。ただしカ「小川氏について」はオ「考証」に含みカ、キについては今回、簡潔に触れる程度とする。

丹生川上神社について

丹生川上神社の簡単な説明を纏めてみることにする。以下は「丹生川上神社」（中社）例祭で参列者に配布されるものより抜き出したものである。

「丹生川上神社の御由緒について」

当社の御祭神、罔象女神(みずはのめのかみ)は、水一切を司る神で水利の神として、又は雨の神として称え、五穀の豊穰に特に早続きには降雨を、長雨の時には止雨を祈るなど、事あるごとに心からの朝野の信仰を捧げ、水神の御加護を祈って来ました。

今を去る事千三百年余り前、第四十代天武天皇白鳳四年(六七五年)「人聲の聞えざる深山吉野の丹生川上に我が宮柱を立てて敬祀らば天下のために甘雨を降らし霖雨(長雨の事)を止めむ」との御神教により創祀せられ、雨師の明神、水神宗社として朝廷の崇敬は殊の外厚く「延喜式」(九二七年)には名神大社に列せられ、又平安時代中期以降は、祈雨の神として「二十二社」の一つに数えられ、祈雨には黒馬を、止雨には白馬又は赤馬を献じ朝廷の特に崇敬する重要な神社でありました。七六三年より応仁の乱の頃までは朝廷よりの雨乞い雨止めの奉幣祈願が九六度なされている事が記録に残っている事からも当社がいかに重要な神社であったかが伺えます。しかし、都が京都に遷り戦国時代以降はそのような祈願も中断され、丹生川上雨師神社もいつしか蟻通神社と呼ばれ、ついには神社の所在地さえ不明となってしまうました。明治維新となり丹生川上神社は何処かと言う研究調査が行われ、明治四年丹生村(今の下市町)、続いて明治二十九年川上村の神社が、夫々有力視され官幣大社丹生川上神社下社、上社とされました。蟻通神社こそが丹生川上神社だと大正十一年、当村出身の森口奈良吉翁の精緻な研究調査により丹生川上神社中社として官幣大社に列格され、ここに従来の二社は三社になったが、官幣大社丹生川上神社としては一社であります。そこでこの神社の社務所を当社に移して、下社、上社を統括して祭務を行ってききましたが、戦後神社制度の変遷により今日では三社別の神社となり当社は「丹生川上神社」と登記されていきます。

本殿は江戸時代文政十二年(一八二九)の建築で東吉野村の文化財に、又瑞垣内にある灯籠は鎌倉時代の弘長四年

(二二六四)銘で国の重要文化財に指定されています。

(平成十九年度例祭で配布、作文は私)

私事に涉るが、平成十年四月から二十一年六月まで丹生川上神社に奉職し、社頭説明を行う事が多かった。質問で最多のものは「上社、下社とどういった関係ですか」というものであった。そこで、今回前記説明が本当に正しいのか考察する事とした。私の見るところ、丹生川上神社の研究は大正年間より進んでおらず、稀に新たな説(例えば松田壽男氏の説)が出てても神社関係者のものでないためか等閑視されているように思える。市販されている本なども大正年間の説、即ち森口奈良吉の中社説を下敷きにしてている。しかし、平成十年に上社が大滝ダム建設の為遷座し旧社地が発掘されるなどの新たな展開や既存の文献を読み込んでいくことによってこれまで気づかなかった点、或は気づいていたが隠されていたのではないかとこの点も含め論を進めていきたい。

ア、「丹生」について

そもそも「丹生」とは何の事か。松田壽男氏は『丹生の研究』(早稲田大学出版部 昭和四十五年初版発行)において水銀の産出するところとしている。そして水銀採掘する人を「丹生氏」とし「丹生神社」を祀るのだとする。そしてその御祭神は「ニウツヒメ」であるとする。(松田氏は「ミツガネヒメ」とも呼ぶ)尤も異論がなくもない。折口信夫氏は「稲村のニホが其のニフで」(『折口信夫全集三』中央公論社 平成七年四月十日初版発行)としている。しかし『萬葉集』巻第十四東歌

まがね吹く 丹生のまそほの色に出て 言はなくのみぞ 我が恋ふらくは
あるいは第十六卷

仏造る まそほ足らずば 水溜まる 池田があそが 鼻のへを掘れ
何処にぞ まそほ掘る岡 こもたたみ 平群があそが鼻のへを掘れ

などであり、仏像づくりに朱砂が必要であることがわかるとされる。奈良の大仏建立に水銀アマルガム鍍金が使用されたということにもつながるのではないかとも思うが、一部「丹生ニ水銀」あるいは「ニウツヒメニミツガネヒメ」ということに対する異論や水銀濃度を計測した松田氏の手法を疑似科学と批判する向きもあるのでこれ以上深入りはしない。

イ、「丹生神社」について

丹生神社は全国に八十八社、丹生都比売を祀る神社は百八社、摂末社も入れると百八十社を超えるとのことである。（「丹生都比売神社由緒記」による）そして「丹生都比売神社」がその本社であるとされるが考察の余地があるように思われる。茲での本題である「丹生川上神社」と「丹生神社」の混同、御祭神の変化もある。松田氏は「丹生神社には、ミズハノメが併祀され、やがて古来の祭神ニウツヒメは、廂を貸して母屋まで占領される始末となった」「もちろん丹生川上神社にシナの雨師が祀りこまれたのは、その後の事で、おそらくは平安朝の前期であつたにちがいない」「丹生神社と丹生川上神社との完全な混同・同視の風潮に助けられて、祭神の変化が他の丹生神社にまで伝染」と述べこれを「丹生神社の大和系変化」と述べている。『二十二社註式』には「水神罔象女神伊弉諾尊化生成 或云闍籠」と記されていることと符合する。

松田氏の説などを参考に纏めると、水銀の神ニウツヒメ↓水の神ミヅハノメ↓雨の神オカミといったところであり、農耕社会の発展と共に水の神が雨の神となり「祈雨・止雨」の神として黒毛・白毛の馬を奉るようになるのであろうか。因みにニウツヒメに高野明神が併祀されていくのを「丹生神社の紀州系変化」としている。（『丹生の研究』）

「丹生川上雨師」の言葉が史書に載るのは『日本後紀』大同三年（八〇八）五月壬寅（二十一日）条である。

ウ、「丹生川上神社」創建伝承

丹生社 號雨師社延喜神祇式云、大和国吉野郡丹生川上神社 水神罔象女神伊弉諾尊化生成 或云闍籠

人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥御垂跡、當社爲大和之別社、見二延喜格、不聞三人聲之深山、立我宮柱、以敬禮者、爲天下降甘雨止霖雨者（『二十二社註式』古事類苑神祇部四 吉川弘文館 昭和五十二年印刷）

太政官符

應_レ禁_二制大和国丹生川上雨師神社界地一事

四至 東限_二塩_一（シホニホヒ） 南限_二大山峯_一 西限_二板浪瀧_一 北限_二猪鼻瀧_一（中略）

寛平七年六月廿六日（『類聚三大格卷一』）

エ、「官幣大社列格」について

明治四年（二八七一）丹生村（現下市町）の神社が「官幣大社丹生川上神社」となる。（小中村清矩の勘文による）しかし、寛平七年（八九五）の四至にあたる地名がないと少宮司江藤真澄が主張し明治七年六月「勘文」を提出。迫村（現川上村）の高麗神社を「奥宮」、丹生村の神社を口の宮とする。明治二十九（一八九六）年、内務省告示 奥宮を上社、口の宮を下社とする。

大正四年、小川村（現東吉野村）の「蟻通神社」が「丹生川上神社」とする森口奈良吉『丹生川上神社考』

大正十一年（一九二二）祭神増加の形で「丹生川上神社中社」とす。社務所は中社におき宮司、祓宜以下中社にて社務を執る。下社には主典二名、上社には主典一名をおき、祭りになれば中社から宮司、祓宜以下が参向した。官幣も中社には例祭、祈年祭、新嘗祭と幣帛供進使が参向したが、上社、下社は例祭のみとなった。（のち祈年祭、新嘗祭も参向するように改められた）

戦後は三社それぞれ別法人となった。中社は「丹生川上神社」と名乗っている。更には「上社」は平成十年、「大滝ダム」建設に際し元の吉野川沿いから山上に遷座した。

オ、「考証」について

まず、「上社説」から見てゆくことにする。簡単に言えば「上社説」は『大日本史』に掲載されている説が嚆矢ではないかと思われる。(史料①『大日本史』巻二五二 源光圀編 徳川総子 明治三十九〜四十発行) 矢張り丹生村付近に四至の地名がないということから上社が元だと主張。

古老の説として「丹生社(上社)の鳥居が洪水で流れ着いたところが下社だ」と記載されている。そして江藤説では「四至」について地名考証を行い

東限鹽勾(シホニホヒ)「勾」ハ「勾」ノ誤ニテ「勾」ヲ「和」ト読。酒勾川ノ例アリ

故ニ「入之波」社頭ヨリ四里程

南限大山峰 大峰山ノ事

西限板浪瀧 未詳

北限猪鼻瀧 萩原村ニ「猪鼻山」と云フ山アリ(「大和国吉野郡丹生川上神社所在勘文」写し丹生川上神社文書)とした。

元来この神社は「高竈神社」であったようだが石灯籠には「丹生大神宮」銘(宝暦十年一七六〇)「十二社大権現」銘のものがある。江戸期以前には「水神さんの祠」という伝であったともいう。氏は二カ大字であったが、「丹生川上神社」ではないかとの説の高まり共に二十四カ大字となった。

次に中社説(森口奈良吉)の典拠であるが

一、丹生川上の地形が万葉の和歌に一致し、いまなお丹生峰の名があること。

二、社地は寛平七年（八九五）の太政官符に記載せる四至（東限鹽匂、南限大山峰、西限板浪瀧、北限猪鼻瀧）と一致する（一）。

三、官幣大社春日神社の古文書「宇陀郡田地帳」により、吉野郡小川村に「雨師明神」があつたこと。

四、優秀な藤原時代の御神体が多数あること。

五、丹生社の銘がある弘長三年（一一六三）の石灯籠があること

六、慶安三年（一六五〇）の丹生宮造営の棟札があること、等である。

「上社説」検証

先ず「上社説」から検証する。そもそも「鹽匂」は「シホニホヒ」と仮名まで打つてあるのに、「匂」は「勾」の誤字であると推測し、それを「入之波」に当てはめるのは結論から地名を導いた感がある。「シホニホヒ」が何処か結論付けることは難しいが、吉野近辺だけでも「入野」（シホノ）も「潮生淵」（シホヒフチ）また大淀町下淵も「シオブチ」のなまりだという説まである。特に「潮生淵」（シホヒフチ）は大名持神社の前の吉野川をさし、毎年六月晦潮水が湧くといわれている有名な地である。今日でも「オナンジ詣り」が行われている。菅谷文即氏の説ではこれらの場所には岩塩が存在するのではないか、潮水がわくというのもその関係ではないかという事であるということである。（『聖地吉野の誕生』）

また、『大日本史』の説は吉野川本流に位置する「現上社」の鳥居が洪水で流されたとしても、吉野川支流である丹生川の、しかも本流との合流地点からかなりさかのぼる「現下社」に流れ着くことは物理的に不可能で、おそらく現五條市西吉野大日川に鎮座する「大日川丹生神社」（『大和志』掲載の「丹生神祠」一二のうちの二つ）に「現下社の鳥居の扁額が流れ着いた」とすることとの混同でないかと考えられる。

上社の旧社地を調査して橋本裕行那奈良県立橿原考古学研究所総括研究員は仮説として、元々の丹生川上神社は上

社であったが、中世、後述する小川氏が力をつけ灯籠なども中社に移転させたのではないかという説を出している。しかし、決定的な事として同じ橋本氏が「宮の平遺跡調査成果について」と発表した中に旧上社鎮座地の遺跡として第Ⅲ期として「この上にはお社は建っていないかと思いません。この遺構は、出土土器などから十一世紀後半から十二世紀に作られたものであるうと思われます。」と述べている。さらに第Ⅲ期として「十二世紀の終わり頃から十三世紀初頭、つまり平安時代の末期から鎌倉時代の初頭と考えられます。その頃に初めて社殿が建立され、以後同一位置で連綿と造替が繰り返されたと考えられます。」(前掲『聖地吉野の誕生』)という点である。この「宮の平遺跡」すなわち上社の位置には少なくとも「延喜式」完成当時の延長五年(九二七年)には社殿がなかったということになる。

上社の旧鎮座地すなわち「宮の平遺跡」であるがここは調査の結果、神社遺構のさらに下から縄文時代の遺跡、遺構が発掘された。それは「環状配石遺構群」で「縄文時代の人々は、どうも盛んに石を使って、何らかの祭祀行為を繰り返していたということが推定できる。」(前掲『聖地吉野の誕生』橋本氏)そしてそれと丹生川上神社上社はたまに偶然重なったと述べている。この中でも述べられているが私も平成十年に上社に参拝した際、現在の境内から旧社地を眺めながら当時の三苦宮司から「この神社はもともと吉野川対岸の磐座を拝むようになっていた」と説明を受けた。旧社殿は南北の線から右に四十五度振れていた。社殿と磐座と神奈備が一直線に並んでいる。確かに「聖地」である。ただし「上社」は元「高麗神社」であり、おそらく「雨師」「霽神」の流行した平安時代、祈雨のため吉野川本流の地点に祀られたのではないかと考えられる。発掘調査の結果である平安末期から鎌倉初期に初めて社殿が建立されたという事実とも一致する。従ってここは延喜式の「丹生川上神社」で派内と考えられる。

「中社説」検証

次に「中社説」の検討に入る。この説の特徴は「丹生川上神社」「神武天皇親祭の丹生川上」「鳥見の霊時」「吉野離

宮」すべてがこの地であるとするのであるが、逆に言うところ一つ崩れてくるとすべてが崩れる可能性があることともなる。

一の「地形」云々は特に「吉野離宮御小川説」にも関連する。

東の 瀧の御門に 伺侍へど 昨日も今日も 召すこともなし 卷二 一八四

瀧の上の三船の山ゆ秋津邊に來なきわたるは誰呼小鳥

吾が行きは久にあらじ夢の回淵瀨にはならず淵にしもあらも 大友旅人

卷三 三三五

告いのちも常にもあらぬか昔見し象の小川を行きて見んため

昔見し象の小川を今見れば弥清けくなりけるかも

「東の瀧」「象の小川」「三船の山」「夢の回淵」はすべて「中社」近辺にある地名であるとするが、「東の瀧」は草壁皇子の飛鳥にあった「東の宮殿」のことであるとされ、川の激流を擬する庭園設備が存在し、たぎち流れる水の落差、すなわちそのような地形のうえに庭園が造られた。水は飛鳥川の上流から引き込んだのであろう。と考えられている。更に「象の小川」「夢の回淵」「三船の山」すべて「吉野離宮」最有力説とされる吉野町宮瀧付近に同様の地名がある。したがって少なくとも「地形」は決め手にはならない。(ただし同様に完全に否定もできないが)

二、四至について

「東限 鹽勾」をやはり「勾」を「勾」の誤字とし「四郷村(現東吉野村)大字大豆生の塩和田であるとした。ちやうどこの「塩和田」を境にしてここより下は「蟻通神社(現中社)」のそして上は「八幡神社」の氏子(大豆生、大字麦谷、麦谷の中の大又の三区で「三谷区」というその「三谷区」の氏神で「大豆生」に鎮座)であるということに着目した。

「北限 猪鼻瀧」 小川村と高見村(どちらも現東吉野村)の境界で「上社説」にも借用された。

「南限 大山峰」 川上村との境界、頂上に「大山」の名あり

「西限 板浪瀧」 国栖との境「イトサミ」

すなわち「蟻通神社」(現中社)の氏子区域の境界線であるが地名は付会もあり決定的なものとは考えられないのは「上社説」も同様。

三、は後に回して四、「藤原時代の優秀なご神体が数多くあること」五、「丹生社の銘のある弘長三年銘の石灯籠があること」六、「慶安三年丹生宮の棟札があること」の三点について、確かに優秀なご神体が何点か存在している。しかしその中でも「罔象女神」のご神像とされるもの、灯籠、棟札の三点は現在の中社である「蟻通神社」ではなく現在は摂社となっている「丹生神社」にあつたものである。森口氏は慶安三年(二六五〇)に「川南の「本宮山」に丹生宮を新造し、ご神体を蟻通神社から下遷宮して直ちに新建の丹生社に遷宮し蟻通神社の御神体を別に祭つたので、ここに蟻通と丹生と別々の神社となつてしまった」と述べている。しかし「下遷宮」とは「仮殿遷座祭」の「上遷宮」とは「本殿遷座祭」の事であるのに曲解或は故意に意味を変えているように感じられる。森口氏の説は何ら文献に根拠がない想像に過ぎない。この「丹生神社」は通称「本宮」と呼ばれているが『大和志』(『日本輿地通志畿内部巻第二十』)に「丹生神祠」として「小村にあり小川莊七村相共に祭祀す。上梁文に丹生大神宮応仁二年(一四六八)重修、又云文明二年(一四七〇)四月神主従五位上中務少輔藤原弘光重修」とあり森口氏は「当時かかる高官の神主がいたことがこの神社の普通でないことが能く知られる」とも述べる。しかし、又「この弘光は上月記や赤松再興記に出ている長祿二年(二四五八)八月後南朝神璽奉還に力を致した小川中務少輔のことで小川城主でもあつた」とも述べているように「中務少輔」になつたのは神璽奪還によつての事である。(長祿二年当時は左衛門尉、寛正二年に中務少輔と記されている)※(大乘院寺社雑事記)すなわち、この「丹生神主小川」(同)の官位が高いのは神璽奪還の功によるもので、社格とは無関係である。

そして、「蟻通神社」と「改称」されたのは丹生都比売神社に倣つてのこと(『正應六年太政官符』(『続群書類従第三

輯下 塙保己一 大正十年三月十日発行)とするが、延宝七年(一六七九)『小村検地帳抄』(「小区有文書」)に「右之外除地」として「一、式反三畝式拾三步四十七間三尺拾五間 村中氏神蟻通明神 境内社有之 是者八十五年以前文禄四末年八嶋久兵衛検地之節除地紛無之付此度除之 一、四町歩百式拾間百間 右境内山 是者八十五年以前文禄四末年八嶋久兵衛検地之節除地紛無之付此度除之」と記されている。これによつて文禄四年(一五九六)太閤検地の際、「蟻通神社」が存在したことが明らかとなり、森口氏の「慶安三年に蟻通神社と改称」したのではないということになる。更にこの小川氏について、森口説をはじめ多くの人が「丹生神主」を「丹生川上神社の神主」としているが、「長祿三年(一四五八)三月二十三日 榎三十三本進之 彼小川 当門跡の坊人なり」(『大乘院寺社雜事記』東吉野村史史料編下巻 東吉野村村史編纂委員会 平成二年九月一日発行による)と記録されている。又、延徳三年(一四九一)十一月十八日のところに「吉野小川丹生神主」と記載されている。この「丹生神主」の「丹生」であるがこれは丁度大和志に式外として「丹生神祠」として記載されている(参考史料②)。「丹生神社」の物であると考えられる。「永禄八年(一五六五)に小川弘栄がその息子の弘久を家督させるにあたり、神祇官の吉田家に神道目録の伝授を請うた。ここですでに春日社興福寺から離脱したことがわかる。」(『奈良県の歴史』永島福太郎 山川出版社昭和四六年)とある。結論から言うとこの小川氏は地方武士という面と興福寺大乘院の坊人から吉田家支配下の神職ということになり「二十二社」である「丹生川上神社」の神職とは考え難い。

中社陞格の決め手となったのが三の「宇陀郡田地帳」である。大正十年十一月春日若宮本殿遷座祭の為参向した内務省の宮地直一考証官は森口奈良吉春日神社社宜とこの田地帳にあった「一、雨師莊田五町吉野郡小何(河)雨師明神領」(『春日神社文書』官幣大社春日神社社務所 昭和十七年十二月二十日発行)と記されているのを偶々発見、「之は先ほどまで(宮地)博士の主張した多年学会の問題となつて居る神武天皇親祭の丹生川上がこの雨師だ」という説を全く否定して、小川の丹生川上雨師神社(蟻通神社)の神領から来たことが明瞭になった。」(『丹生川上神社昇格記』森

口奈良吉 昭和三十五年 船津弥八郎)そして翌大正十一年、「郷社蟻通神社」は「郷社丹生川上神社」と改称の上「官幣大社丹生川上神社中社」となるのである。しかし、この際の宮地考証官と森口祢宜の感激に流されてしまったのかこれ以上の精緻な調査は行われなかった。

「雨師荘」は建久二年(一一九二)『長講堂所領注文』貞応三年(一一二四)『宣陽門院親子内親王所領目録』建治二年(一一七六)『吉田経俊処分状案』延慶四年(一一三二)『伏見上皇院宣案』応永十四年(一四〇七)『長講堂領目録』に「大和国雨師社」と記載されているように「長講堂領」であった。そして『三箇院家抄』に「雨師荘長享一年(一四八八)多武峰収納帳へ」とあり更に『大乘院諸雜事記』には延徳三年(一四九一)初めて小川氏が雨師荘の年貢を納めないといった記事が掲載されている。このことから考えると宇陀郡の雨師荘は長講堂領から多武峰領、そして吉野小川雨師明神領になったことがわかる。そしてそれは十五世紀の事であると考えられる。つまり、小川の丹生神社と雨師の丹生社との関連もここに端を発するにすぎないと考えられる。しかも小川雨師明神領になったいきさつは小川氏の勢力増大、多武峰との長年に亘る抗争によるものであると考えられる。

さて、この「雨師社」は延喜式の「大和国宇陀郡 丹生神社」であると考えられる。「日本書紀」記載の神武天皇親祭の「菟田の朝原」はここであるとする説が多数である。しかし異説もある。「丹生神社」は水銀の神、すなわち「丹生都比売」は「みづがねひめ」であると主張する松田壽男氏は『丹生の研究』で大和水銀鉱山に隣接する菟田野町(現宇陀市)の入谷(元は丹生谷と書いた)にある「丹生神社」附近こそが神武天皇親祭の場であるとする。しかし、その松田氏も式内社は雨師の方であると考えていた。

「中社」は現在摂社となっている「丹生神社」と「丹生川上神社」の混同、又「丹生神社」と「蟻通神社」の混同によって「蟻通神社」が「丹生川上神社」であると考えられ或は意図的に混同したとも思われる。「丹生神社」の祭神は「ミヅハノメの神」であり、「蟻通神社」は恐らく「蟻通明神」であったのだろうが明治になって「蟻通明神」では

具合が悪いので蟻通の説話は開化天皇の御代であるとして祭神も開化天皇としたのであると考えられる。因みに泉佐野市の蟻通神社は「大国主神」田辺市の「蟻通神社」は「アメノコヤネノミコト」かつらぎ町は「思兼神」とそれぞれでばらばらである。しかし、小川村の「蟻通神社」は境内神社に「大国主神」「春日大明神(アメノコヤネノミコト)」も祀り、現在では「思兼神」をも祀っているのは面白い。

慶安三年(一六五〇)「丹生宮造管上棟文」(丹生川上神社蔵)によれば「大祢宜」三名「祢宜」三名の名前がある。繰り返すがこの「上棟札」は「丹生神社」から発見されたものである。

一方、江戸時代の「蟻通神社」の方は『宝暦九年(一七五九)小村神社取調書上控』(小区有文書)によれば「神主之儀者別当地向と申僧相勤申候、社人之儀者氏子之内老年代りくニ相務申候」と別当と氏子の代表者が勤めたようでありとても二十二社のように思えない。今日においても大字小には「年豫」の制度があり一年間氏子の代表者が神事の為に餅を搗く等の役目を果たしている。

今回、あまり触れなかったが森口説は丹生川上神社、吉野離宮、神武天皇親祭の丹生川上、鳥見の霊時すべてがこの附近だとするのであるが、今日「宮瀧遺跡が『日本書紀』に記された吉野宮・吉野離宮そのものであることは、長い研究史とこれまでの発掘調査によってもはや疑うべくもないであろう」(『増補吉野町史』)とされ、神武天皇親祭の丹生川上についても「また『丹生の川上』とあるためか、奈良県吉野郡『丹生川上神社』の場所とされるが、文脈上、吉野郡に求むべき理由はなく、その社も上社・中社・下社のいずれの地とも決定できない。文脈からいえば、神武天皇の拠点は宇陀郡宇賀志、しかも次に「彼その菟田川…」とあるから「丹生の川」は菟田川のことになる。つまり、その上流が丹生の地(榛原町大字雨師に延喜式内社丹生神社がその名を残す)であるから菟田川を「丹生の川」と称したと考える。」(『日本書紀』頭注 西宮一民著 小島憲之補 小学館新編日本古典文学全集2 一九九四年四月二〇日)とあるように本文をそのまま読む限りは「丹生川上」は宇陀説が優位である。(ただし前掲の如く同じ宇陀

郡(現宇陀市)内の入谷丹生神社附近説もある)さらに鳥見の靈時は桜井説、榛原説、富雄説とあるが今日では桜井説がやや有力である。「上榛原、下榛原」の語によって榛原説が有力なようにも見えるが「榛原」は近世以前は「灰原、這原」などと記されていたものを「鳥見の靈時榛原説」によってこの字に変えたともいわれている。

従って森口説のいうところの東吉野が丹生川上神社であり吉野離宮でもあるので持統天皇はたびたび行幸された際、丹生川上神社において祈願されたなどというのは事実ではないと考えられる。そもそも「廣瀬、龍田の神」は具体的に記されているのに名前も記されていないのに「吉野宮に行幸」というだけで丹生川上神社で祈願というもおかしな話ではある。

いづれにせよ、中社は小川郷の氏神、郷社「蟻通神社」であり、文治元年泉佐野の蟻通神社から分祠ということの真偽はさて置き、「大和三天祭り」ともいわれる勇壮な「小川まつり」も郷社としての祭りであり、本質的には丹生川上神社とは無関係であると考えられる。

「下社説」検証

延喜式に「大和国吉野郡 丹生川上神社」と記され、淳仁天皇天平宝字七年(七六三)から宝徳二年(一四五〇)まで九十六回奉幣が行われた。文明四年(一四七二)中断(「親長卿記」)されてから近世に至るまで、朝廷も衰微し奉幣は行われなかった。しかるに寛永十五年(一六三八)から正保二年(一六四五)までの間に刊行されたと考えられる林羅山『本朝神社考』には丹生明神の項はあるものの所在地は記載されていない。(よく「丹生社は所在不明」と記されているといわれるがそのようなことは書かれていない)一方、白井宗因『神社啓蒙』寛文十年(一六七〇)には「丹生丹生社、在大和国下市傍山中」(『古事類縁神祇部四』吉川弘文館 昭和五十二年五月二十五日発行)と詳細に記された。扱、吉野時代の『新葉和歌集』(岩波書店岩波文庫 一九四〇年一月二十九日第一刷)に次のような歌がある

芳野の行宮にて、五月雨晴間なかりける比、思召「し」つづけさせ給「う」ける

後醍醐天皇御製

この里は丹生の川上程ちかしいのらばはれよ五月雨のそら

しかし、この和歌でさえ「上社」「中社」の説明に使われている。森口氏は「ちかし」というのは京都に比べて近いという意味とまで言うが、ここまで言ってしまうえば牽強付会としか言えない。しかし同じ和歌集に次の歌が載っているのを見れば「丹生河」が何処か明白となる。

賀名生の行宮にて、人々哥よみ侍る中に

冷泉入道前右大臣

忘れめやみかきに近き丹生河のながれにうきてくだる秋霧

賀名生皇居跡というのは現在の五條市西吉野賀名生の「堀家住宅」であるが、その前に「丹生川」が流れている。

松田壽男氏の説にもあるが「延喜式」編纂当時に「丹生川上神社」の前の川が「丹生川」と呼ばれていたという証拠がなければならぬとする。そしてその何よりの証拠は「大和国宇智郡 丹生川神社」が存在していることであるとする。この神社は現在では衰微してしまっているが「金峰山に源を発する丹生川を支配する神であらうが、川上社のように雨師信仰が結びつかなかつたので、閑却されたのであらう。」（「日本固有民俗信仰」松岡静雄 刀江書院 昭和十六年）

したがって江戸時代宝永七年（一七一〇）中御門天皇の勅使が差遣されたのをはじめ嘉永七年（一八五四）孝明天皇の繪旨も下った。明治四年になって官幣大社に列せられたにもかかわらず、前掲江藤少宮司が近辺に四至の地名がないことを理由に「勘文」の提出となったことは先に述べたとおりである。

しかし、「地名」というものほど扱いにくいものはない。「こじ付け」「合理化」「作為」などがますます問題を複雑にする。『官幣大社丹生川上神社下社考証書』（奈良県吉野郡丹生川上史跡顕彰会 昭和十六年二月一日）という書籍

がある。この書籍によれば中世以降神社は両部集合化しているのにそちらの研究が足りない云々と書かれた本で難解であるが、その中にも下社説に立った「四至」について「南限 大山峰」は「山上ヶ岳」すなわち「大峰山」の「弥山」とした。「東限 鹽匂」は「入之波」「西限 板浪瀧」は所在不明であるが吉野と高野山の境界線上であろうとしている。「北限 猪鼻瀧」は吉野町丹治付近であるとしている。いずれの説にせよ、平安時代から千年が経過してその地名を探し当てるのは至難の業である。

結論

これまで見てきた様々な点から「延喜式内社としての丹生川上神社」は現在の下社であると考える。江戸時代「丹生大明神社」と呼ばれていたこの神社は松田氏の説によれば元来「ニウツヒメ」を祀る「丹生神社」であったが神武天皇の親祭によって「水の神」として「ミヅハノメ」を祀りこみ「ニウツヒメ」は追いやられた。更には「雨師」神の流行で「オカミ」が祀られるようになったとしているが、この説の当否はともかくとして、御祭神の変遷は近代以降もあつたことは事実である。官幣大社列格当初「ミヅハノメ」を祀っていたのであるが、明治二十九年「上社、下社」となった際上社の祭神「タカオカミ」と下社の「ミヅハノメ」を入れ替え、更に大正十一年、中社陞格の際、上社「タカオカミ」中社「ミヅハノメ」下社「クラオカミ」と入れ替えた。人間の都合で祭神が変わることは歴史上ままあることではあるが、あまりにも変更が多すぎるくらいが感じられる。

大正以来三社で一社となったが戦後それぞれ別法人となり、今日では三社詣りなどの行事や三社の宮司が一堂に会し、更に古代さながらに大和神社宮司が奉幣の為に参向しての祭典(水祭)、シンポジウムなども行われている。しかし、それでも未だに下社氏子、特に旧社家には中社、小川村(現東吉野村)への恨み言を公然と口にするものも少なくない。「小川に一度でも住んだ奴は下社の神主には不適格だ」「大正時代からのうらみがある」と。神社の研究はややもすれば信仰を汚す事にもなりかねず難しいものであると思う。「そのような研究などせず、信仰に生きよ」「ロマ

ンがあつていいじゃないか」「三社あつて御神徳も三倍だ」という意見も痛いほどわかる。

「本物の丹生川上神社はどこどこだ」と言つてしまえばあとの二社は「偽物」ということになる。歴史的に見て「官幣大社丹生川上神社」は三社一社であつたが「延喜式内社の丹生川上神社」は一社、それも一座であるのでそれは現在の下社であるとしたい。